

## 第1章:イエス・キリスト、この世の救い主

この世に生れ落ちた人間に付きまとう最大の問題、それは魂の救いです。老若男女問わず、全人類に差し迫ったニーズだといえます。人生とは何なのか、だれがわたしを造ったのか、なぜわたしはここにいるのか、なぜ死ななければならないのか、なぜこの世に苦しみがあるのか、どうすれば罪の意識から逃れられるのか、平和や幸せを続かせるにはどうすればいいのか、良い生活を送るために必要な力や知恵はどうすれば得られるのか…。国や個人の経歴には関係なく、このような多くの悩みは尽きることがありません。しかし、よき知らせがあります。人間につきまとう、さまざまな苦悩への答えがあるのです。イエス・キリスト、この世の救世主、この方こそが、その答えです。

第一章は、この本全体を通して最も重要な章であるということから、書き始めたいと思います。なぜなら、本章では、聖書で一番大切な約束についてご説明するからです。ヨハネの福音書第6章47節に、「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている」と書かれています。この単純明解な約束は、乾き、干上がった大地を潤す水のようなものです。そして、小さな子どもでさえ理解できるほど明解です。また、罪人の王でさえも、希望や逃げ場を見つけられるほど、寛容な約束なのです。イエス様は救い主であり、そこに救いの言葉があります。つまり、人間を救う御言葉があるのです。本章では、救いの約束が書かれた、この一節を解き明かしていきたいと思います。もし、救い主が必要だとお思いでしたら、この章に書かれていることを、ぜひ受け入れてください。もしくは、ご自分の罪に疲れ、新しい人生が必要だとお思いでしたら、同じく、受け入れて欲しいと思います。わたしはイエス様を信じています。イエス様こそが、この世の救い主であることを知っています。そしてほかにもう一つ知っていることがあります。それは、今の、あるがままのあなたをも、お救いになりたいとイエス様が切望されているということです。

一つお尋ねします。なぜ、イエス様はこの世にいらっしゃたのでしょうか？使徒パウロはこう答えました。「『キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世にきて下さった』という言葉は、確実に、そのまま受け入れるに足るものである。」(テモテへの第一の手紙第1章15節) 事実、イエスという御名には、「救世主」、「神は救い」という意味があります。マタイによる福音書第1章21節には、「彼女は男の子を産むだろう。あなたはその名をイエスと呼ぶことになる。この者こそ、自分の民をその罪から救うからだ」とあり、また同様に、「キリスト」とはイスラエルを救った「油を注がれた者」を意味しています。この御名に含まれる意味は非常に重要です。なぜなら、わたしたちは救いを受けるため、イエス様、ただお一人だけが救い主だと理解しなければならぬからです。イエス様は主であり、指導者であり、また教師でもあります。救いを受けるには、イエス様をただ救い主として見なければなりません。その点から、ルカによる福音書第2章11節は大変重要な一節となります。そこには「すなわち、今日、ダビデの町で、あなた方に救い主、主な

るキリストが生まれたのだ」と書かれています。この節では、イエス様が主であるだけでなく、イエス様ご自身が救い主になられることを決められたと教えています。主が、救い主になりました。つまり、わたしたちが救いを得るために主であるイエス様を従う道を選ぶのではなく、正確に言えば、イエス様はすでに主であられました。それでも尚、イエス様は救い主になると決められたのです。イエス様は主人でありながら、しもべになりました。わたしたちはイエス様だけを、救い主として理解しなければなりません。イエス様は、この方こそが救い主だと、わたしたちが理解できるように、この世に来てくださったのです。この世へ来ること、そして救い主となられることは、イエス様、ご自身の決断でした。では、だれを救うためにいらっしゃったのでしょうか？「罪人を救うためにこの世にきて下さった」（テモテへの第一の手紙第1章15節）とあります。罪人とは、イエス様を「主」と呼べない人々を指しています。実際、聖書では救われた人々のことを、罪によって死んでいた者、神の敵であった者と教えています（エペソ人への手紙第2章1節、ローマ人への手紙第5章10節）。これが正に、イエス様を救い主であると理解しなければならない理由です。悔い改めを知らず、よりよい行動を取りたいと願えない人々を救うべく、この世に来られたのです。自分の十字架を背負い、イエス様の後について行くことのできない人々を救うために。罪人は非力で、主のために何の良き働きもなすことができません。ですから、イエス様が救いのために来られたという知らせは、本当に素晴らしいものなのです。あなたは疲れ、倦怠感に満ち、また病気などではありませんか？自由への道しるべがなく、浮き沈みの中を堂々巡りしていませんか？罪や過ちからの重荷を背負っていませんか？死や罪の定めを恐れていませんか？もし、ここに当てはまることがあれば、あなたには今、救い主が必要です。救い主を必要としないという方は、救われません。イエス様は、人生を変える必要のある人、またそう望む人のために来られたのではありません。そうではなく、人生を一変と新しいものとする必要のある人のために来られました。

「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている。」（ヨハネによる福音書第6章47節）この約束は恐らく、聖書で最も簡潔な約束だと思われます。わたしたちにでも理解できるよう、イエス様が簡潔な表現をしてくださったのです。イエス様ご自身、神の王国は幼子のものであり、わたしたちも幼子のように受け入れなければならないと証言しています（ルカによる福音書第18章16節から17節）。このように、わたしたちは永遠の命への約束を幼子のように受け入れ、そして主は、約束されたことを必ず成就されると、ただ信じるしかありません（ローマ人への手紙第4章21節）。幼子のように、信仰のみによって、この約束の一節を受け入れたとき、わたしたちは神の救いを知ることになります。そして、罪からの完全な解放、力、愛、神への敬意、川のように流れる平安を得るでしょう。さて、皆さんは、「では、どうすればいいのだろう？」、「この一節から、どうしてそのような解釈ができるのだろう？」と疑問を持たれたかも知れませんが、出来る限り分かりやすくご説明しますので、もうしばらくお付き合いください。先でも触れたように、この第一章全体を通して、ヨハネによる福音書第6章47節で語られて

いるイエス・キリストの救いをご説明しますので、より深くご理解いただけるかと思えます。さて、救いとは何か、いつ受け入れることができるのか、執行人はだれか、どうすれば受け入れられるのか、といった4つの事柄がこの一節から分かります。手短かに、これら4つの点について見ていくと同時に、この救いの約束を受け入れることの重要性を要約したいと思えます。この考察により、約束の偉大さがより理解しやすくなることでしょう。では初めに、この節が何を語っているのかを見ていきます。そして、そのあと、約束を受け入れることの偉大さと、それが人生に与える影響へと理解を進めます。

まず、救いについて、この箇所では何と書かれているかを見てみましょう。さて、救いとは何でしょうか？「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている」。救いとは、永遠の命です。全人類は死にます。全人類は、恐れと罪の意識をもっています。死とは人が打ち勝つことのできない敵であり、また、死のとげは罪です。(コリント人への第一の手紙第15章56節)人類は死や罪から救われなければなりません。だからこそ、永遠の命が救いなのです。さて、ここで永遠の命からもたらされる栄光について説明するつもりではないのですが、その揺るぎない事実を2つ、ご紹介させていただきます。まずは、永遠の命はよきものであるということ。人生は良いものです。これはだれも否定できない事実だと思います。苦しみや暗闇の中を生きている人に限り、この事実を否定しようとはしますが、それは本当の人生がどういったものなのかをご存知ないからです。苦しみや暗闇での歩み、それは本当の人生ではありません。次に、永遠の命を持っている人は、満ちたりているという事実です。人生は良いものですが、永遠の命は無限です。暗闇や死もなく、何かを失う恐れもありません。なぜなら、それは永遠だからです。無限に良いものを持っている人は、もう何かを手に入れようと思えば必要はないのです。

イエス様はこの世に来られました。そして、わたしたちの罪とわたしたちの命のために、十字架の上で亡くられました。イエス様の十字架での死によって、わたしたちは永遠の命を受ける権利を得ました。この永遠の命の威力は、イエス様の復活からも見ることができます。この方こそが命です。そしてそれだけでなく、使徒ヨハネは、最初の手紙でイエス・キリストご自身が永遠の命であること、そしてその永遠の命は、イエス様の内にあるのだと伝えています(ヨハネの第一の手紙第5章11節と20節)。すなわち、永遠の命とはイエス様ご自身であり、イエス様とはそのようなお方なのです。永遠の命は真実です。朽ちることもなく、非の打ち所もありません。祝福に満ち、純潔で、よきお方です。ほかのどのような褒め言葉でも当てはまるほど、素晴らしいお方なのです。世界中の全言語をもってしても、イエス・キリストご自身である永遠の命の、大きさ、長さ、奥行き、高さなど、到底表現することはできないのです。

では、次に、この救いをいつ受けられるのかという点について見ていきたいと思えます。「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている。」ご覧のように、「持っている」という現在形が使われています。なんと輝かしいことでしょう。「わたしを信じる者は永遠の命を『持つだろう』」と言われただけでも、十分すぎる

ほどの栄光です。ですが、わたしたちの喜び、安堵のため、主は、「わたしを信じる者は永遠の命を持っている」と仰ったのです。今、この瞬間が受け入れるとき、つまり、救いの日なのです（コリント人への第二の手紙第6章2節）。アーメン。わたしたちの救いの日は、今日です。救いの栄光は天の御国に入ってから楽しむものである、という考えは間違いです。完全なる永遠の命は、今日のこの日のためにあります。そのことを悟り、この真実を受け入れましょう。この世にあって、救いによる完全な自由を見つけるために。天の御国での体がこの地上での体に勝るように、御国での栄光はこの地上での栄光に勝るものでしょう。しかし、今、この地上で受けられる救いの栄光も、その威力、偉大さ共に、永遠なのです。

続けて、その救いをだれが執行するのかについてみてみましょう。「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている」。ここで書かれている「わたし」とはだれでしょうか？ イエス・キリストです。イエス・キリストが提唱し、執行し、わたしたちに救いを与えてくださります。「『神』を信じる者は永遠の命を持っている」や「『どこそこ教会での教義』を信じる者は永遠の命を持っている」とは言われていません。イエス様は明確に「わたしを」と断言しています。わたしたちはだれに目を向けられるのでしょうか？ イエス様以外の、だれか、またはほかの何かへと向けられていないのでしょうか？ もしそのようなことがあれば、それが弱さが充満している理由、また、毎日毎日、止むことなく多くの罪の告白が続けられる理由なのでしょう。わたしたちの目が、父、聖霊、使徒、そのほかのものに熱心に向けられているのなら、救いによる完全な自由がないのも、うなづけます。また、わたしたちの聖書の学びが神学的な仕組みや律法、神の恩恵や恵み、摂理、契約、歴史などのものばかり扱ったとしたら、それがこの世に、鈍感で弱く、病気を患う人々が多い理由だと言えるでしょう。わたしたちは、ほかの何者でもなく、主イエス・キリスト、ただこの方だけに目を向け、心を注ぎましょう。イエス様はわたしたちのすべてなのですから。ハレルヤ！

最後に、4点目である、どうすれば救いを受けられるのかについて見てみましょう。「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている」から分かるように、「信じる」ことにより救われます。この輝かしい知らせにより、すべての人々が救いへと招かれているのです。あなたは、罪の重荷を背負い、また悔い改めることもなしに、非力に甘んじていませんか？ 限界で、望みすら持つことのない状態ではありませんか？ とりわけ、このイエス・キリストの救いは、そのような状態にある方々のためにあります。それだけでなく、イエス様を救い主であると理解し、信仰を持ったその瞬間、わたしたちは救いへと導かれるのです。繰り返す必要はないとは思いますが、以下のことに留意してください。イエス様は「わたしに『従う者』は永遠の命を持っている」とも、「わたしを『おのれの主とする者』は永遠の命を持っている」とも、また「『祈りをささげ、待ち、求め、また約束する者』は永遠の命を持っている」ともおっしゃいませんでした。とても単純な言葉、「信じる」という言葉を使って語られました。イエス様は、子供でさ

え理解できる言葉を用い、それ故、わたしたちは「信じる」という言葉の裏に、暗く隠された意味があるのではないかと探る必要がなくなりました。ヨハネによる福音書第6章47節と同じような聖句があります。そこには「しかし、彼を受け入れたすべての者たち、その名を信じた者たちに、彼は神の子供となる権利を与えた」（ヨハネによる福音書第1章12章）と書かれています。この節にも「その名を信じた」とあります。このように、信じる以外何もないのです。わたしたちは、「信じる」という言葉の意味を、正にそのまま、最も自然で基本的な考えとして理解しなければなりません。そしてこの節を、小さな幼子のように受け止めなければならないのです。「信じる」という言葉をお使いになった神に感謝しましょう。だれしもが、今、ここで本当の救いの豊かさへと身をゆだねることができるのです。

この永遠の命の約束が、実際の生活へどのように適用されるのかを見る前に、神からの約束を受け入れる、そのすばらしさを簡単に記したいと思います。パウロはヘブライ人への手紙の中で、神の約束は不変であると伝えています。つまり、取り消されることはありません（ヘブライ人への手紙第6章16節から18節）。約束を受けた者はその全生涯において、約束が果たされるという保証の上に、安息を得るという意味です。今一度、約束の言葉を見てみましょう。「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている。」イエス様は「本当にはっきりと」という言葉で、約束を修飾されていることにお気づきになったでしょうか？まるで、これから言わんとすることへの疑いを先に和らげ、より確固たるものにしようとされているかのようです。イエス様の約束は、破られることはありません。「天と地は過ぎ去るだろう。それでも、わたしの言葉は決して過ぎ去ることがないのだ」（ルカによる福音書第21章33節）と、念を押されています。決して破れることのない、イエス様がわたしたちに与えてくださった約束、その安らぎの中で休もうではありませんか。

さて、この時点で、「イエス様から、すばらしい約束が与えられていることは本当です。ですが同時にイエス様ご自身から、多くの厳しい言葉が語られていることも事実です。たとえば、自分の十字架を背負い、イエス様の後について行くこと、また、自分の父、母、妻、兄弟たち、子供たち、自分の命さえも憎まなければならないこと（ルカによる福音書第14章25節から33節）などを言われています。」このように異論を唱える方もいらっしゃるかもしれません。これは否定できないことです。イエス様は確かに、柔和で思いやりのあることも言われていますが、厳格で厳重なことも言われました。それだけでなく、後の聖書内で見られるように、パウロを含む使徒、特にヤコブは、教会内で正しい働きをしない者たちを厳しく叱責、非難しています。さらに、ヨハネの黙示録では、イエス様自ら、不信心な教会や人々を脅威されています。このように、すばらしい約束が与えられているものの、恐るべき脅威や叱責、厳しい言葉も受けるかもしれないということも、また真実なのです。では、そのような恐ろしく、また厳格な聖句によって、救いの約束は取り消されるのでしょうか？脅威や裁きはどのように？どちらをもってしても、約束が取り消

されることはありません。つまり、約束が取り消されるに値するものは何もなく、イエス様の約束はすべてに勝るのです。旧約聖書も同じではなかったでしょうか？アブラハムは契約を受け、その後、律法が作られました。さて、その律法は神からの契約を帳消しにしてしまったのでしょうか？否、そのようなことはありませんでした。「わたしの言う意味は、こうである。神によってあらかじめ立てられた契約が、四百三十年の後にできた律法によって破棄されて、その約束がむなしくなるようなことはない。」（ガラテヤ人への手紙第3章17節）この箇所では使徒パウロは、正に、このことを説明しています。実際、旧約聖書の99%以上は律法について書かれています。神は、自分の言葉で約束を取り消すことができるのでしょうか？そうではありません。使徒パウロはガラテヤ人への手紙の同じ章の中で続けて、律法や聖書に見られるすべての事柄で、この救いの約束と矛盾するものはない、と語っています。「では、律法は神の約束と相いれないものか。断じてそうではない」（ガラテヤ人への手紙第3章21節）と。聖書を読むとき、わたしたちはイエス・キリストへの信仰からでなく、律法というメガネを通して理解しがちであるという問題が、しばしば起こっています。新約聖書でも同じことのように見えます。これが、ヨハネによる福音書第6章47節と、ルカによる福音書第14章25節から33節が矛盾しているように見える理由です。しかし真実として、ルカによる福音書第14章25節から33節でイエス様が語られている厳しい行いを全うできる人はいません。ヨハネによる福音書第6章47節に書かれていることを信じる人には、自然とルカによる福音書第14章25節から33節が自然な成り行きとなるのです。わたしたちに与えられた約束は、どんな理由によっても取り消されることはありません。ですから、約束をしっかりと心に留め、諦めることのないようにしましょう。わたしたちの目が見るもの、わたしたちの感情や自分の心が語ることに従わず、イエス様の約束を信じましょう。多くの人々や悪魔は、この約束をわたしたちから奪い去ろうとします。しかし、諦めたり、手放したりしないでください。また、どんな些細な妥協もしてはなりません。この約束はわたしたちのもので、そして、わたしたちは、死にいたるときまでも、この約束を握り続けるのです。わたしたちは心をしっかりと定めなければなりません。イエス様は、忠実なお方であり、約束されたことを確実に、成就することができますと信じるのです（ローマ人への手紙第4章21節）。十字架と復活を通し、わたしたちは、このお方、イエス様こそがこの世の救い主であり、忠誠で誠であるという確信を受けています。イエス様は、約束を必ず守られます。十字架でのイエス様のあがないによって得た救いは、イエス様への信仰によって受けることができます。これがヨハネによる福音書第6章47節での約束が教えていることなのです。しっかりと握り締め、力の限り手中に収めていきましょう。

ここまで、この一節への基本的な理解と、約束を受けることの重要性をみてきました。それでは、わたしたちの生活で見られる恩恵やその約束の適用をいくつか見てみましょう。すべてを書き上げることはできませんが、最もよきこと、最も栄光たることを数点、ご紹介したいと思います。

まず、何よりも素晴らしいのは、平安、愛、神へ完全な信頼を置けるということ、また、イエス様と友情という関係性を得るということです。「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている。」イエス様は救い、永遠の命、天の御国、わたしたちが得るもの、そして神がくださる分け前です。イエス様を信じることで救われる、ああ、神、わたしたちは過去、現在、未来において、イエス・キリストを信頼します。恋に落ちたかのようなのです。この救いは、何とロマンチックなものでしょう。わたしたちの魂の恋人です！ヨハネは、第一の手紙で、「イエスがキリストであることを信じる者はだれでも、神から生まれた者です」（ヨハネの第一の手紙第5章1節）と語っています。イエス様を信じた瞬間、わたしたちは生まれ変わります。死人の中から生かされ、新しい命を与えられるのです。そして救い主へと目を向けるように、目が開かれます。イエス様はすぐ側にいらっしゃいます。直に顔をあわせているかと思えるほど近くに。だれがわたしたちに命を与え、わたしたちを愛されているのでしょうか？わたしたちは、その方を知っています。イエス様は、わたしたちのすべて、わたしたちの息、わたしたちの唯一の願いです。イエス様のことを思い空想している時間、そして兄弟、姉妹と共に主を賛美する時間が、その日の至福の時間となります。わたしたちは主にあって一つです。そして、教会という主の体は、全く素晴らしいものです。主が頭で、わたしたちはその体、主はわたしたちの内におられ、わたしたちは主の内にあります。主はすべてなのです。わたしたちは主の知識、愛、恵みにおいて豊かになり、主と共にあること、ただそれだけが最大の望みとなります。それ以外には何も望むことはなく、「主イエスよ、早く来てください」と祈りも一つにまとまるのです。

ここで、何千ページという分厚い本で説明するよりも、わたしのお伝えしたいことが明確に表れている詩をご紹介します。イエス・キリストを思う気持ちが表現されている詩です。

完全な体、イエスの再臨、ため息と共に待ち焦がれる  
心を無にして、わたしの体を主の体へとささげよう  
ああ、もっと一つに  
主を賛美し、自分たちの命は捨て去ろう  
イエスでなければ死を選ぶ  
わたしの元へ来られ、助けてくださった  
わたしに触れ  
いやされた  
恐怖に脅え、死の床にいたわたしを  
助けてくださった  
共に集い、感謝をささげよう  
愛し合い、ささげあおう

互いを受け入れ

主を知り、主を待つ。天と地がなくなり、そしてそのとき向き合う；御前にひれ伏し悟るであろう、その方が神であると。ほかのだれでもなく；わたしたちは養われ、その甘い住処に溶けてなくなった

喜びの涙、心の嘆き、切なさが募る。主のその完全な美しさの前に

美しさは光り輝き、白く、清く、純粋な方 — 何と聖なる心だろう；主は良き方、わたしたちはその方を切望する

なくてはならないもの わたしたちの息 わたしたちは息をのむ

主はわたしたちの命、主は命そのもの

あなたの愛を教えてください。わたしの心を取り去ってください

あなたの愛は光り輝く

あなたの愛を教えてください。待ち焦がれているのです

あなたの心を見せてください。そして愛していると告げて欲しい

わたしを願い求めると、わたしのことを待ち焦がれると、

わたしなしではだめだと、そして、あなたの喜びであると

わたしはシャロンのバラ 荒野のユリ

わたしに巡り会い、共に過ごすことがあなたの望み

わたしの心も、常に同じであるように。あなたと永遠に；いつもあなたの御前に

イエス様は永遠に、わたしたちの一部です。わたしたちの最大の望みがイエス様でないのであれば、それは、わたしたちの心があるべき所がないからです。愛し合う恋人たちが大海に阻まれ、長い間会うことができないとしたらどうでしょう？その恋人たちの唯一の望みは、再び二人で過ごすことではないでしょうか？また、もしまた一緒に過ごすチャンスがあるのに、「いいえ、結構です。わたしたちは離れていたほうがいいのです」と言ったなら、どうでしょう？それが愛と呼べるものなのではないでしょうか？中にはそのような愛もあるかもしれませんが、大多数の人は、それが真の愛かどうか疑うのではないかと思います。わたしたちとイエス様も同じなのです。今、離ればなれであるにも関わらず、一番の願いが、向かい合い、共に過ごすことではないとしたらどうでしょう？再会の日が早くなるようにと願わないのでしょうか？（ヘブライ人への手紙第9章28節、ペトロの第二の手紙第3章12節）イエス様はわたしたちの最大の宝です。わたしたちの喜びです。わたしたちは主を喜び、心に思いめぐらすのです。

イエス・キリストご自身である、永遠の命を受ける者となったとき、わたしたちは完全となります。イエス様を受け入れ、満たされたことにより、神からの召命を成し遂げました。つまりそれは、「靈的にすばらしい人」になる必要ないということです。あなたはすばらしい方で、あなたに勝る人はいないのです。イエス様が内に生まれ、これからの人生は主を楽しみながら過ごすのです。主イエス様にあって、不公平は存在しません。主を信

じる者にはみんな、内に同じ方が住まわれています、それは、イエス様ご自身なのです。劣等感を感じることもありません。目を開いてイエス様を見上げるだけでいいのです。イエス様はあなたの受けたすばらしい冠であります。嗣業であるイエス様へ目を向けるだけでいいのです。

さて、そろそろ次に進みます。次は、約束から受ける恩恵へと進みたいと思います。イエス様を信じた方はだれでも、力を得ます。永遠の命を持っているとしたら、何かがあなただを傷つけることができましようか？永遠の命を持つあなたに、弱さを覚える理由はあるのでしょうか？そのようなことは決してありません。そして、わたしたちは、そのことを信じなければならないのです。永遠の命は、約束されています。聖書から、イエス・キリストは弱さのゆえに十字架につけられましたが、神の力によって生きておられる（コリント人への第二の手紙第13章4節）ことが分かります。わたしたちも同じように弱いのです。ですが、イエス様の復活によって、神の力を直接受ける者となりました。わたしたちは、キリストの犠牲によってではなく、その復活によって生きるのです（ローマ人への手紙第6章4節から5節）。主イエス・キリストはわたしたちのために、十字架の上で亡くなられました。そしてその血で、わたしたちの救いへの代価を支払われたのです。けれども、主は死にとどまらず、復活されました！生きているのは、もはやわたしたちではなく、キリストがわたしたちの内に生きておられると、聖書は教えています（ガラテヤ人への手紙第2章20節、コロサイ人への手紙第1章27節）。ここでいうキリストとは、復活されたキリストです。わたしたちの内に生きられ、わたしたちはこの生きるキリストの力によって生きているのです。

わたしたちはイエス・キリストという永遠の命を持つ者ですから、その生活の中にある弱さへは、どんな言い訳も通用しません。「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている。」このことを、しっかりと頭に叩き込みましょう。実際、わたしたちはこの命を分かち合っているのですから。

確かに、わたしたちへの反発の声は限りなく、わたしたちの感情も常に変動します。しかし、わたしたちには、命と、わたしたちの心にある敵をも支配する永遠の命の力が宿っていることを信じてください。「あふれるばかりの恵みと義の賜物とを受けている者たちは、ひとりのイエス・キリストをとおし、いのちにあつて、さらに力強く支配するはずではないか」（ローマ人への手紙第5章17節）と語られているのです。ヨハネによる福音書第6章45節、わたしたちに授けられた約束が語られている2つ前の節でイエス様は、「預言者たちの中に、『彼らはみな神によって教えられるだろう』と書いてある」（ヨハネによる福音書第6章45節）と言われています。「あなたの子らはみな主に教をうけ、あなたの子らは大いに栄える」と、イザヤ書第54章13節でも見られます。また、同じ書の中で、以下のようにも語られています。「『すべてあなたを攻めるために造られる武器は、その目的を達しない。すべてあなたに逆らい立って、争い訴える舌は、あなたに説き破られる。これが主のしもべらの受ける嗣業であり、また彼らがわたしから受ける義である』と主は

言われる。」（イザヤ書第 54 章 17 節）これはわたしの愛する聖句です。なぜなら、嗣業のすばらしさを垣間見ることができるからです。父なる神の教えであるイエス・キリストへの信仰。それを受けた人々への嗣業とは、なんとすばらしいことでしょうか。どんな敵がわたしたちを傷つけることができるのでしょうか？絶望や罪が、あなたを打ち砕くのでしょうか？いいえ、わたしたちは、何に対しても、決して屈することはありません。「すべてあなたを攻めるために造られる武器は、その目的を達しない」のです！あなたを苦しめ続けていることや、悩ませている人などがいますか？責められ、また自らを責めていませんか？罪悪感に苛まれていませんか？「すべてあなたに逆らい立って、争い訴える舌は、あなたに説き破られる」のです。ですから、そのような悩みは起こり得ません。神のために、必死になって、すべてを犠牲にする決心をしなければならぬのでしょうか？あるいは、何度も何度も、悔い改めをし続けなければならないのでしょうか？そうではありません。「『彼らがわたしから受ける義である』と主は言われる」のです。義とは、善行や自らに課した修行によって得られるものでしょうか？いいえ、違います。義とは、無償で与えられた嗣業、神から受け継いだものであり、「これが主のしもべらの受ける嗣業」と書かれているとおりのことです。では、主のしもべらの受ける嗣業がこのようなものであるのなら、神の子が受ける嗣業とは、どれほどすばらしいものとなるのか、想像に難くないでしょう（ヨハネによる福音書第 1 章 12 節）神の子となったわたしたちは、イエス・キリストをとおし、永遠の命という嗣業を受けています。今、あなたは、その嗣業を喜びを持って、受け継いでいますか？そうであると望みますが、もしそうでなければ、次のことを考えてみてください。たとえば、ある父親が息子に、遺産を残したとします。息子がもし、それを拒否したり、軽視した場合、父親の気持ちはどうでしょうか？少なくとも、いい気持ちはしないと思います。イエス様をこの世に送りだされた神を、わたしたちが信じないと拒否するなら、それは、この親子の例と同じこととなります。神は、すべての良きことを、イエス様であってわたしたちに授けてくださっています。もし、わたしたちが弱き者のまま、信仰も持たずにいれば、それは神から授かったものを拒否しているのと同じなのです。あなたの父親が、ステーキとロブスター、それに選び抜かれたワインを準備しているのに、乾いたパンと濁った水の方を選んだら、父親はどんな気持ちになるのでしょうか？きっと、がっかりと落ち込むことでしょうか。ですから、わたしたちは、神から与えられた嗣業をしっかり引き継がなければならないのです。力の限り、握り締めていきましょう（マタイによる福音書第 11 章 12 節）。

次に、イエス様への信仰によって得られる力と権利について、数箇所、聖句を見てみましょう。ヨハネによる福音書第 1 章 12 節では、「しかし、彼を受け入れたすべての者たち、その名を信じた者たちに、彼は神の子供となる権利を与えた」とあります。神の子供となる権利を得たのです。神の子供が、悪事を働くのでしょうか？いいえ、神の子供は、完璧です。その力を得たのです。同じく、ローマ人への手紙による手紙第 1 章 16 節でも、「わたしは福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも、すべて信じる者

に、救を得させる神の力である」と、その力について語られています。あなたは救いを必要としますか？あなたは救いの中にいますか？もし、ご自分が非力だとお考えなら、まだ救いの中にいるとは言えません。どのような悩みであろうと、悩みがあるのなら、あなたには救いが必要です。神のお力が必要です。では、どうすれば力を得ることができるのでしょうか？キリストの福音を信じればいいのです！もう一つ、イエス様をとおして得られる力について語らえている箇所を見てみましょう。テモテへの第二の手紙第1章7節です。そこには、「というのは、神がわたしたちに下さったのは、臆する霊ではなく、力と愛と慎みとの霊なのである」と書かれています。イエス様に信仰を持つわたしたちは、これらの力、愛、慎みを備えています。手に入れようと努力する必要はありません。この救い、救い主への信仰から得られる力を持って、歩みましょう！

さて、イエス様を信じることによって受ける恩恵はほかにもまだあります。それは、わたしたちが完全になるということです。これは、御前で、「位置的に完全となる」居場所を得ることであると、多くの方がお考えのようです。この完璧な位置とは、イエス・キリストの体であるメンバーとしての場所を指すと考える教えがあります。この教えから言えば、イエス様のあがないによって、わたしたちが罪人であっても、神はわたしたちに罪をお認めにはなりません。わたしたちは罪深き者であるにも関わらず、完全なる者です。そして、この考えは、「相対的な完全さ」へと続きます。信仰を持つ者たちは、少しずつ成長し、清らかさ（神聖さ）を増していけるよう、設けられた完全さの段階を経ながら全人生を歩みます。「究極に完全である」という状態は、わたしたちが、霊にあって復活した体を受け天の御国に入るまで手に入れることはできません。

この教えをまとめますと、わたしたちは御前にあって完全ではあるものの、この地球上での全人生を、罪深き状態から少し罪深さが軽減した状態へと進み、罪のない完全な霊にある体を授かるのは、最終的な救いの時となります。その時まで、わたしたちはこの肉体に住み、嘆きながら歩いていかなければならない、と教えているのです。しかし、このような教えは、全くばかげています。罪から罪へなどと、わたしたちは進みません。わたしたちは栄光から栄光へと進むのです（コリント人への第二の手紙第3章18節）。栄光から栄光へ進むことこそが、罪から自由への解放を意味しているのではないのでしょうか（ヨハネによる福音書第8章33節から36節）？永遠の命を「持っている」のに、どこに暗闇があるというのでしょうか？永遠の命を持つこの瞬間に、どのような欠陥があるのでしょうか？「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている」のです。

わたしたちが、いかに「位置的」のみならず、「経験的」にも（考え、言動すべてにおいて）完全であるかという証拠を、聖書から聖句を引用し長々のご説明することもできるのですが、それは遠慮したいと思います。クリスチャンとは、いかに完全で罪のない人々であるかと説明するために、長い聖句リストをご紹介しますより、ヨハネによる福音書第6章47節でイエス様が仰っていることを、ただただ信じていただきたいと願います。「本当

にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている。」ここにある言葉は、とても単純で明確です。自分が見聞きしたことに左右されず、また他人にどう思われているかなどに惑わされることなく、ただこの約束をしっかりと持ち続けましょう。

「でも、やはりわたしは罪深き人間です。どんなに一生懸命頑張っても、また罪を犯してしまいます」と、多くの方が反論されることも分かっています。声を大きくして言います。ご自分を、罪人で罪からの解放がない人間だと思われる理由は単に、イエス様がなされた御業を、そして今もなされ、これからもなさる御業を信じていないからです。イエス様が、信じる者たちのために行うと言われた御業を、信じていないのです。イエス様は、あなたを赦し、罪から解放し、永遠の命を与えるために来られました。それでも尚、自分は罪人だと信じるのなら、あなたは正に罪人です。イエス・キリストへの信仰によって、神から義とされたと信じることで、あなたは義となるのです。もう一度、同じ言葉をいいますが、イエス様への信仰を持っていながら、尚、自分は罪人だとお考えであるのなら、それは、劣った福音を信じ、受け入れてしまっている結果なのです。そのために罪が生まれるのです。また、イエス・キリストの約束を幼子のように受け入れていないが故に、弱く、否定的な考えを持ち続けているのです。そして、イエス様への信仰によってではなく、律法というメガネを通して自分を見続けているせいなのです。イエス様はわたしたちに、永遠の命を約束されました。どうして疑うのでしょうか？たとえ天と地が否定したとしても、わたしたちは約束を信じましょう。あなたの目が見たもの、耳が聞いたものに頼らず、信じるのです！あなたの心や道徳心が何を語っても、主を信じましょう！どんな悪魔のささやきにも耳を傾けず、主を信じましょう！心に浮かぶ非難の声にも負けず、主を信じましょう！わたしたちには永遠の命があり、そしてイエス様ご自身が約束された通り、自分は完全なものであると信じるのです。

ここでイエス・キリストを信じるすべての方々に、考えていただきたいことがあります。イエス・キリストの十字架の意味は何でしたか？罪の死ではなかったか？ローマ人への手紙第6章1節から11節を、ぜひ、注意深く読んでいただきたいと思います。ここでは、キリストとの死と共に罪は死に、わたしたちはキリストの復活によって生きている者であると、明言されています。ですから、もし、まだ罪が存在すると信じ続けるとすれば、それは本質的に、イエス・キリストの死は無意味で、十字架での成就是失敗に終わったと考えているということになります。自分はまだ罪人であると信じ、毎日毎日、何年経っても、懺悔と悔い改めを続けているとすれば、それは結局、イエス様の死に何の意味も見い出していないということなのです。それだけでなく、イエス様の死以前である旧約聖書の時代を生きているのと同じなのです。旧約聖書の中では、毎日、罪のため犠牲がささげられました。しかし、その犠牲では、ささげる人々の良心のとがめがなくなることはありませんでした。（ヘブライ人への手紙第10章1節から3節、10節から11節）。しかし、イエス様の死は、一つのささげ物によって、永久に完全にされたのです（ヘブライ人への手紙第10章14節）。わたしたちが、自分は罪人であると信じ続け、罪の告白や悔い改めが繰り返

し行われるのであれば、十字架での御業が失敗であり、何の価値もなかったと信じていることになります。十字架による犠牲は、旧約聖書で語られる動物によるいけにえと、なんら代わらないのでしょうか？（これはイエス様の血を、何度も繰り返し懇願するときに、わたしたちが持つ本質です。何度もキリストをいけにえにしているかのようです）。イエス様は、一度だけ死なれました。そしてわたしたちは、罪と罪の意識から解放されました。わたしたちは、旧約聖書で契約を受けていた人々より、優れた約束を持っているのです。（ヘブライ人への手紙第7章22節）。ですから、どうぞ、イエス様を信じ、臆病な生き方を捨ててください！「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている」。

さて、ここまで進んできましたが、完全さについての説明で混乱されている方もいらっしゃるかもしれません。この完全さとは、罪がない、という意味です。罪とは、法律に違反するものをいいますが、罪がないとは、神の法を全うすることを意味します（ヨハネの第一の手紙第3章4節）。ですが、この法への全うを、一言で言い表すことができます。それは、「愛」です（ローマ人への手紙第13章10節）。コリント人への第二の手紙第3章18節では、イエス様を信じた後、栄光から栄光へと（罪深き状態から、少し罪深さが軽減した状態ではなく）変えられていく、と書かれています。栄光から栄光へと変えられていく、これは、愛のある姿から、愛に溢れる姿へと変わっていくことを意味します。栄光から栄光へと変えられていきますから、わたしは今日よりも明日、より深く人々を愛するでしょう。この栄光から栄光への変化は、一生を通じて続きます。主なるイエス様が、いよいよ再臨される時、わたしたちは完全なる栄光の姿になるのです。

ここで取り扱っている完全さは、自分はもう完全だと、傲慢になってしまう方が出てしまう危険性を伴う、繊細なテーマのようです。ですが、傲慢になる必要など、全くありません。イエス・キリストが地上に来られ人類の罪のために死なれた時、イエス様の心にあったのは、一人ひとり人間をいかに神聖で罪なき者にするか、ということではありませんでした。その御心にあったのは、教会という完全な体を作ることだったのです（使徒行伝第20章28節、エペソ人への手紙第5章25節から27節）。つまり、イエス様の御心は、各個人の義ではなく、信じる者で作られた体全体、共同体としての完全さへと向けられていました。わたしたちが全体として不完全である限り、一人ひとりの信じる者が究極の完全と成り得ることはありません。わたしたちが一つの完全なものとなるまで、この全体としての体は成長し続けます（エペソ人への手紙第4章12節から13節）。そして、イエス様が戻って来られるその時、わたしたちは一つとして集められ、完璧で神聖で、栄光の姿の教会となって、イエス様をお迎えするのです（エペソ人への手紙第1章10節、第5章25節から27節）。イエス様と直接お会いする再臨の時に、体であるわたしたちは頭とつながり、そして、主と共に永遠に、完全な一つとなるのです。ハレルヤ！

信じる者たちの完全さへの結論として、もう一度だけ書き添えます。究極の完全と栄光とは、一人ひとり、個別の信者に見られるものではありません（ヨハネによる福音書第17章

23 節、ヘブライ人への手紙第 11 章 40 節)。ですから、互いに愛し合いなさいと、新約聖書で何度も何度も語られているのです(ヨハネによる福音書第 13 章 34 節、ローマ人への手紙第 13 章 8 節、エペソ人への手紙第 5 章 1 節から 2 節、ヨハネの第一の手紙第 3 章 11 節など)。イエス様の最大の目的は、わたしたち信じる者が互いに愛し、愛され、神の御子の栄光の恩恵を受けながら、イエス様の体にあって完全となることです(ヨハネによる福音書第 17 章 23 節から 24 節)。すべての信者が一つの体として完全となる瞬間、その瞬間こそ、一人ひとりの信者が究極の完全たる者となるのです。人が大天使やイエス様ご自身のように神聖だったとしても、もし体として不完全であるなら、その人には何の利益もありません(コリント人への第一の手紙第 12 章 26 節)。体は苦しみの中にいるのに、自分を大天使と同じように神聖であると考えている人がいるとすれば、その人は単に自分を欺いているのです。共に体を構成するメンバーから受ける、愛や滋養の必要性から目を背けているのです。わたしたちには、お互いが必要です。体の中で必要のない部分などないのです(コリント人への第一の手紙 12 章 20 節から 27 節)。すべてのメンバーは、みな同じように不可欠で、わたしたちの究極の完全さは、頭であるイエス・キリストにあって一つとなるときに成し遂げられます。すべての体を構成するメンバーは、頭であるイエス様への信仰によって成長します。イエス様への信仰の結果、わたしたちは、主の体の内に生きます。そして、イエス様がわたしたちを愛し、寛大であるように、わたしたちも互いに気遣い合い、愛し合うのです(エペソ人への手紙第 4 章 15 節から 16 節)。

この約束から受ける恩恵に関して最後にお話したいことは、自由についてです。正しく言いますと、安息と愛への自由がわたしたちには与えられています。「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている。」わたしたちは、イエス様という永遠の命を持っているのです。あなたに足りないものはなく、また手に入れようと探しあぐねるものもありません。それだけでなく、わたしたちには、恐れることは何もないのです。このように、わたしたちには真の安息と偽りのない愛があります。この二つのテーマについては後ほどご説明しますが、本章でも少し、この愛と安息という二つのテーマについて触れたいと思います。

安息への自由は、イエス様を信仰するわたしたちにとって、すばらしい恩恵です。「勞苦し、重荷を負わされているすべての者よ、わたしのところに来なさい。そうすれば、わたしがあなた方に安らぎを与えよう。」イエス様はこの言葉と共に、わたしたちを安息へと招かれました。安息とは、救いと直接的に関係しています。ヘブライ人への手紙第 4 章では救いを、神の安息に入るとたとえています。神が天地創造の 7 日目に休まれたように、わたしたちも神の安息へと入るべく、自らの業からの休みが必要です(ヘブライ人への手紙第 4 章 4 節、10 節)。疲れたものは、真の安息を得、神がそのすべての荷を背負ってくださることを知ります。救いとは、永遠の大安息日に入るようなものなのです。このような安息を知るすべての人々に、「ハレルヤ」の叫びを！

わたしは個人的に、安息を、心の平安と静寂という点に結びつけて考えるのが好きです。次のイザヤ書 26 章 3 節は特に好きな箇所となっています。そこには、「あなたは全き平安をもってころざしの堅固なものを守られる。彼はあなたに信頼しているからである」とあります。持続する心の安らぎと落ち着きという性質は、わたしたちの嗣業であり権利です。イエス様にあって信仰を持つ者として、このことを理解しなければなりません。イエス様が安息の状態にわたしたちをとどまらせてくださることを期待しましょう。たとえわたしたちが今、どんな状況にあったとしても、イエス様は必ずそうしてくださいます。そして同時に、安息は義務ではないことも、覚えておいてください。イエス様にあって、わたしたちは完全な自由を得ています。ですから人は、休まないことを望むことをも許されています。たとえば、同じ信仰を持つ人や家族に助けが必要だというような、緊急の場合があるかもしれません。愛のために、緊急を要すると感じ、まるで主の王座の前で何度も執拗に嘆願するかのようになり、自らの休息を拒み、本当にその嘆願を成就させようと肉体的に可能な限り、体を疲労させるかもしれません。その人は安息の自由を持ち続けますが、愛するという自由もまた、彼のものなのです。その愛するという自由が、彼に行動を起こさせるということも、多くあるのです。

さて、次へ移りたいと思います。わたしたちは、愛する自由も授かりました。「愛は、わたしたちが神を愛したことにあるのではなく、その方がわたしたちを愛し、ご自分のみ子をわたしたちの罪のための贖いの犠牲として遣わして下さったことにあります。」

(ヨハネの第一の手紙第 4 章 10 節) わたしたちは、神からの無償の愛を受けたという、ただそれだけの理由で、愛する自由を授かりました。神の愛は、愛することを知らない者たちへの神の愛に表れています。では、どのように愛して下さったのでしょうか？わたしたちのあがないのために御子をこの世へと送られ、そして、わたしたちのために、ご自身に、その神の怒りを浴びせられたのです！神の愛については、多くの場合、ごく一般的な言い方で語られています。たとえば、日々の食べ物や必要なものを備えてくださるといった神の愛がありますが、このような一般的な愛は、神の愛ではありません。この節では、どこに神の愛を見ることができるのか、はっきりと書いてあります。そうです！御子をお送りになったという神の愛が指摘されています。御子を送られた神への知識がなければ、わたしたちは決して神を正しく語ることは出来ません。また、神の御子を先に信じられないのであれば、決して、父なる神を信じることはありません。わたしたちは神を愛していませんでした。しかし、さきに神がわたしたちを愛して下さいました。そのため、わたしたちは、その神からの愛を知り、信じたのです(ヨハネの第一の手紙第 4 章 7 節から 21 節)。これがわたしたちの愛のはじまりです。同じく、ヨハネの第一の手紙の中で、完全な愛はわたしたちの恐れを投げ捨てると書かれています。恐れのあるところでは、愛は完全ではありません。恐れは、完全に信頼を置く、自分を献げるということを出来なくさせるからです。しかし、イエス様を信じたとき、愛する自由が授けられます。罪への恐れもなく、主の御前にあって足りない者でもありません。傷つくこと、人による裏切り、そのような

恐れはもう必要ないのです。わたしたちの信仰はイエス様にあり、愛によってもたらされます。なぜなら、わたしたちは自由と愛する能力を手にし、その愛は互いのために喜んで命を捨てられるほどなのです。この愛については、第4章でもっと詳しく触れたいと思います。愛とは、イエス様を信じることにより生まれ出る実です。そしてその愛はすべてに勝るのです。

この章ではイエス・キリストへの信仰により、わたしたちに与えられた救いの偉大さをご説明してきました。イエス様を信じる人すべてが瞬時に、救いを受けることができます。イエス様へ自由に近づくことができます。あなたのいる場所、過去にしてしまったこと、また、今あなたがしていることなど、何も心配しなくてもいいのです。イエス様の御父は、あなたが非力であることをご存知です。だからこそ、あなたが神によって生きるように、この世にイエス様を送られたのです（ヨハネによる福音書第6章57節）。あなたが知るべき唯一の名前はイエス様の御名だけです。その御名だけを求めましょう。ほかの名はありません、イエス様が神です。この方こそ真実の神、また永遠の命です（ヨハネの第一の手紙第5章20節）。この方は誠実で、その言葉は決して過ぎ去ることがありません（ルカによる福音書第21章33節）。今、ここで、無償の救いを授けてくださいます。「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている。」あなたがこれまでに、どんなことをされたのかは関係ありません。どんな報いも、人への罪の告白も、主への約束も、何も必要ないのです。後にも先にも、条件などありません。この方が、あなたの過去、現在、未来への全責任を、ご自分に課してくださっています。「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている」のです。わたしはすべてにおいて、主を信じています。とても誠実にしてくださっていますし、わたしには、この章で書き上げてきたことすべてを、してくださいました。もし、疲れ、重荷を背負っているのであれば、あなたには救い主が必要です。主を信じましょう、この今の瞬間、この場所で。あなたへの救いは、忠実になされ、豊かな命が与えられるでしょう（ヨハネによる福音書第10章10節）。すでにイエス様を信じてはいるのに、イエス様にある嗣業をまだ十分に持っていないという方へ、特に聞いていただきたいことがあります。どうか、ここに書いてきたことを受け入れてください。ここに悪魔はいません。ここにあるのは、ふんだんな安息と良きこと、そして愛です。「労苦し、重荷を負わされているすべての者よ、わたしのところに来なさい。そうすれば、わたしがあなた方に安らぎを与えよう。」（マタイによる福音書第11章28節）わたしの最大の望みは、以下の節に表れています。「わたしたちすべての者が、神の子を信じる信仰の一致と彼を知る知識の一致とに到達し、全き人となり、ついに、キリストの満ちみちた徳の高さにまで至るためである。」（エペソ人への手紙第4章13節）ここに書いてきたことをいくつか試みてください。そしてそれが善か悪か、ご判断ください。ぜひ、勇敢になり、信じてみてください。弱気になって祈り、待ち続け、そしてまた祈り、待ち続ける、そのような必要はないのです。そのような受身の待ち人にはならないでください。主を信じましょう。主はあなたに、はっきりとこ

う仰っています。「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている」と。アーメン。